

研修報告 C班1グループ ランドルト環

C-1グループは、関東・新潟・東海・関西・四国の日本各地から、キャリア1年目から13年目まで、部署も教務関係から総務、情報系までの幅広いメンバーが揃いました。グループ名を「ランドルト環」（視力検査で用いるCの記号）と決めましたが、この名前には、この研修を通して、メンバーの今後の仕事の“視力”が上がるようにとの願いが込められています。

C-1グループの各大学のICTの活用状況について確認したところ、休講連絡・学生の呼び出し、履修登録・成績発表等で概ねICTを活用していますが、休講連絡にTwitterを利用したり、人数規模を考慮して履修登録をあえて用紙で行う等、大学により特徴がありました。

初日の講義を踏まえ、2日目のグループワークに臨みました。午前中は「責任ある情報を公表するため職員の役割を考える」というテーマで、まずは大学が情報を公表する意義や目的を考えました。その中で、大学の社会的責任（USR）を果たすため、地域の知の拠点としての役割を果たすため、という社会的なものから、今後大学を目指す高校生の進路選択に必要な情報を提供し、入学後のミスマッチを極力防ぐため、という教育的なものまで挙がりました。しかしながら、今多くの大学が公表している情報は、国から指示された項目を、補助金がマイナスにならないようルールに従って出しているもので、必ずしも情報の受け手、とりわけ、高校生とその保護者が知りたいと思う情報が提供されていないのが現状です。例えば、「3つのポリシー」（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）が多くの大学で定められていますが、その内容は高校生には観念的で分かりにくく、具体的にどう大学教育の中に反映されているのか不明なケースが多いと思われます。また、近年はインターネットを使って大学の情報を集める高校生や保護者が多くなっていますが、大学のホームページを開いても、欲しい情報がサイトの奥深い所にあり、なかなか辿り着けないこともあります。こういった不具合が起きる原因の1つとして、大学に関する情報を作成するにあたり、情報を公開する目的やターゲットが明確にされず、情報を持つ部署単位で作業が行われていることにあると考えました。情報を作成するにあたっては、目的を定め、ターゲットとニーズを正しく把握し、そのために有効な手段は何かをトータルで考える必要があると考えます。そのためには、「情報企画（戦略）課」といった専門部署があると望ましいとの案が出されました。高校生が必要とする情報は「大学に入ってから4年間と、その後をデザインできる情報」、保護者が必要とする情報は「子供を預けることを安心できる情報」と捉え、例えば、前者については、文字だけでなく映像を活用した授業の紹介や、毎週更新されるシラバス（ウィークリー・シラバス）を公開する等して、高校生に授業を身近なものとして感じてもらい、更にこの授業から次に発展する授業や資格、進路を示すことで、ストーリー性のある情報が提供できるのではないのでしょうか。後者については、学費や退学者数等の数字の羅列ではなく、たとえ大学にとってマイナスのことであっても、その数字や退学に至るまでの大学としての取組みなどの解説をすることで責任のある情報が提供できると考えます。そのために我々事務職員が果たすべき役割を考えると、情報を公表するミッションを正しく把握し、教員や各部署に対して意義や理解を求め、多数の情報を総合的に集約、精査、判断できることであると、意見がまとまりました。

2日目の午後、「学士課程教育の質的転換を図るための職員の役割」について討議を行いました。教育の内容について、事務職員がどこまで踏み込んで語れるか難しいテーマでした。まずは、教育の質的転換が求められている要因を考えました。大学のグローバル化、ユニバーサル化、大学進学率の高まりと共に学生が多様化し、講義を詰め込む従来型の授業形式はもはや限界を迎えていること、社会からも、主体的に考えられ、どんな状況にでも対応できる人材が求められるようになったことが要因として挙が

りました。そのため、大学は「社会人基礎力」を涵養できる教育の質的転換を模索していますが、そこには事務職員が関与すべき面は多いと考えます。シラバス（授業計画）を一例に考えると、シラバスは教員から学生に対しての言わば“公約”であり、極めて大切なものです。シラバスを書くことに意義を感じない教員が多いようですが、教員が使いやすい、学生が見たいと思えるようなwebシラバスシステムを事務職員が提案し、開発していくことが可能ではないでしょうか。webシラバスを発展させれば、毎回の授業の予習・復習にも活用でき、授業アンケートとも関連付けることで、“生きたシラバス”を作り出し、学生の主体的な学びを促すことができます。これを可能にするためには、事務職員も教員と共にFD研修を受ける等して、教員が抱えている課題を知ることが重要であり、また、教員に改善を促せるだけの問題発見力・問題解決力・提案力が事務職員に求められると考えます。対等な立場で、教員と事務職員との協働が不可欠です。

3日目、これまでの講義やグループワークを経て、まとめの討議を行いました。「情報の公表」と「教育の質的転換」は不可分な関係であり、大学の改革や新しい価値の創造のために今後の大学が重要視しなければならない喫緊の課題であること、それに携わる事務職員の役割は、情報の質を見極め、有効な公表の方法を考え、有効なICTを身に付けて教員が出来ない部分をフォローし、情報の公表に関するPDCAを常に行うことであることを再認識しました。

3日間の研修を経て、キャリアや職種の違いを超えて、大学が置かれている状況と事務職員に求められる役割を深く考えることができ、これまでとこれからの業務を見直す良い契機となりました。メンバーはこれからの業務において、常に“情報”を考えながら仕事に臨む意識を養えたと思います。